

グラウンディングからみる<分節><無分節> 井筒俊彦と鈴木大拙、場と自由の深度問題の検討

加藤広康（立命館大学）

井筒俊彦は、華嚴哲学の四法界概念からさらにすすんで、事事無碍「神自体の内部で」、自己顕現が生じている状態を「理理無碍」として定義している。

しかし、澄観が定義した事事無碍法界では、本来「事」のなかに「理」が融合しているとされており、そうであれば、井筒がアラビーにみるように「神自体の内部」という領域を設けて、両無碍概念を区別する意味がなくなってしまうのではないかと考えられる。

井筒は、覚者の境位を「二重映し」として説明するが、仮に事事無碍と理理無碍という二つの無碍概念の区別に意義があるならば、二つの法界では、事と理との重なり合い、融合の仕方が異なるはずである。そこで、本発表では、同じく、即非の論理として、分別と無分別の観点から分節の「二重化」の問題を捉えた論者として鈴木大拙を取り上げる。

では、井筒や大拙の<分節>、<無分節>をどのように取り扱うのか、認知言語学において提起されたグラウンディングと認知モードの問題と関連させて論じたい。

日本語の言語の主観性という特徴については、森有正、和辻哲郎、坂部恵、近年では山本史華によって論じられてきた。しかし、超越や内在の議論、形式と形態、潜在性と現働性といったテーマと比較して接地という問題は、哲学分野において、その重要性に関わらず、これまで十分に議論されていないように思われる。

ピエール・レヴィは潜在(virtual)、現働(actual)、可能(possible / potential)、実在(real)の4つの存在様態を区分したうえで、いわゆるヴァーチャル・リアリティを「潜在的なもの」＝「実在するが実体は隠れているもの」に分類している(Levy 1995[2006])。

何が、潜在的なのかという問いは、どう接地しているのかという問題から、分節化、二重化という問題意識は、接地性(神の内部はどこから見た内部か)こうした存在様態の区別と対比することでより明確にすることが可能となる。

よって、本発表では、認知モードにおいて、場と主体の深度の相関がどのように把握されるのかに着目し、場と体用の問題を自由経験の<深度>の問題として読み替えることを試みる。